新刊紹介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

『同志社歳時記』

生島吉造
松井全　編

（同志社大学出版部、B6判
二一四頁、六〇〇円）

この度「同志社大学出版部」より出版された、生島吉造、松井全両氏の編著『同志社歳時記』は、同志社百年の歴史（丁度本年が百周年にあたる）をふり返る場合に、様々な好資料を提供してくれるだけではなく、多くの出来事や、普通では見過ごしにしていることの数々を、改めて気付かせてくれる。

長い歴史の中で、ともすれば忘れ勝ちになっている大切なことを、はっきりと教えてくれる、まことに時宜に適した好著といえる。

例えば、同志社の校章（徽章）にしても、だれが考案し、作ったか、また、その校章の持つ意味などについては、現在の若い人々はほとんど無関心であり、又全然知識を持ち合わせていないのではないだろうか。

三ツ葉のクローバーなどという歌から連想して、三ツ葉のクローバから考案され、図案化されている位に思っている人がないではないかと想像される。

又同志社の建築物、特に明治時代に建造された赤煉瓦の彰栄館、チャペル、有終館、クラーク記念館（元神学館）等についても、ただ同志社のキャンパスを美しく彩どっているということ位だけで、寄付者の名前やその意図について深く知っている人々は次第に少なくなっているのではないだろうか。

明治の貴重な文化財として、これを丁寧に保全せねばならないということだけではなく、そこには幾多の同志社を愛し、同志社のキリスト教々育に期待をかけ、更に、創立者の新島襄氏の教育理想に感激して、同志社を支援し、日本にキリスト教主義教育を開花させ、新らしい立派な日本国になることを念願して捧げられた多くの浄財の賜であったことを忘れてはならない。

住谷総長が『同志社歳時記』の序文に記しておられるように『この調査と記録はいわばやがて将来発刊されるのであろうところの『同志社百年史』といったような「本史」にたいする「外史」的な意義豊かな裏付けとして添えられることであろう。

「大日本史」にたいする「日本外史」が人びとにとってより感激的であり、より深く読者を刺激し発奮せしめ、それが日本の歴史に多く深く豊かに極めて興味ある「華」を添えたかを思うとき、この「同志社歳時記」は同志社本史にとって、それがあるまにその意義を連想し、高く評価することができるであろう。』

と述べておられるのは誠に至言である。

ここに登場している人物は、同志社百年の歴史の間に生きた、有名、無名の同志社人男女約二百余名で、故人となった人のみ

である。現在生きている人々で、この『歳時記』に加えらるべき人々も多くあることは予想されるが、一応、故人のみに限定して登場させていることにも、編者のきめ細かい配慮によることと想像される。

また、ここに記載されていない故人の人人の中にも、これ以外に是非ともこういう人々は登場させて欲しかったという人々も数多くあることも予想出来る。そうした人人を加えればおそらく三百六十五日を遙かに突破することであろう。

こうした労作は半年や一ヵ年かかって決して出来上るものではない。恐らく両氏は、数年かかって、コツコツと準備をされたことであろう。丁度積み上げた煉瓦の建物のように、不断の努力の結晶がこの本となったのである。

ただ、強いて「魯を得て属を望む」ことを許されるならば、ここに登場して来る人々はほとんどすべてが何等かの形で創立者の新島先生なり、又同志社に関係を持った人々ばかりである。卒業生であり、教師であり、学生生徒であった人々であるが、中にはその関係が明確に記されていない人々が何人かあるように見受けられる。

何故そうした人々がここに記載されたかをもっと具体的に説明して欲しかった。でないと編集の原則ともいうべきものがはっきりとしない憾みがあるように見受けられた。

例えば、〝福沢諭吉〟にしても、ただ単に慶応義塾の創設者で、『学問のすすめ』を著し、「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」といった福沢先生自身の文章をもって福沢諭吉の人物を語らせているが、それがこの『同志社歳時記』にどういう意味で登場しているのか、も一つ明瞭でない点がある。

両氏とも明治の前後の私学の創設者である。誰しも東と西の私学の二大創立者として比較し、尊敬しても、福沢諭吉と新島襄とはこういう関係であったからとか、あるいは新島襄が明治二十三年一月二十三日逝去した際、追悼文を新聞に掲載してその死を惜しんだので、その「追悼文」を掲載して、新島先生との関連性を明らかにするとかになれば、その掲載の事由もよくわかり、望外の幸と思うのである。

同志社について、また同志社の歴史について、更に同志社を支えてこれを愛し、蔭になりひなたになって同志社を今日まで守り、発展させた多くの人々の業績について数々教えられ、偲ぶことが出来た。今更ながら同志社百年の歴史の重みを知り得て、感謝の外はない。

反面、同志社全般についての知識の不足さを痛感した者の一人である。

改めて生島、松井両氏の努力を多とし、その労作に対して深甚の感謝の意を表したい。

（大江直吉・校友会専務理事）

大下あや著

『父　海老名弾正』

（主婦の友社、B6判　一六九頁、一、〇〇〇円）

著者大下あやは故大下角一学長の夫人であり、弾正先生の次女にあたる。あとがきに、著者はこう言っている。「私は七十歳になったころから……父がむしょうに懐し

くなりました。神を信じ生涯を伝道に生き抜き、永遠の希望を追い求め続けた父の姿が次々と浮かび、それが私の心をとらえて、私をもりたててゆくのです。活き活きと動くテレビの画面のように。」たしかに、それぞれの表題を持つ数々の短文は、文字どおりテレビの画面のように展開して、父・海老名弾正の人間像を躍如たらしめる。植村正久、内村鑑三、吉野作造などの名も挙げられているが、これらの人々との関係も、これまで取り上げられてきたのとは違った角度から、温かい光のうちに写しだされている。だが、そうだからと言って、この書はたんなる愛情だけで綴られたものではない。そこには偉大な預言者、思想家、また教育者、海老名弾正を敬慕するに足る勝れた知性のひらめきが随所に感じられる。

父子と言っても、著者と弾正先生との間には四十六年の開きがある。幕末から昭和初期にわたる時代の変遷を生きた先生を、明治生まれの次女が古稀をすぎて回想しているのが、この書の性格である。そこには身近かさとともに距離もある。それを読むことによって私たちは著者とともに現代に身を置きながら、歴史を幕末までさかのぼることができる。その百二十年の間に日本にも世界にもさまざまの事件や変化が起ったが、海老名先生はそれらを自覚的に受けとめながら、常にその先を見通しておられた。そしてその預言者的英知の源泉は、かれの心の奥底における神秘的信仰体験であった。そのことについての共感的理解がいかなるものであるかを、あやさんの文章はよく示してくれている。

その内容を一々紹介するよりも、直接読んでいただくに及くはない。ただ私自身についての蛇足をつけ加えれば、先生が同志社に来られる前から私はそのお話を拝聴していたのであり、大正九年にはチャペルでの総長就任の辞を感激して聞いた学生のひとりであった。その後私の留学時代、先生もしばらくニューヨークに滞在、ホームズ宣教師とともに同志社のため募金に専念しておられた。難波君、魚木君や私などは時おりホテルに伺がって先生のお話相手をつとめたが、学問や思想のことになると青年の若さを感じさせる鋭さで詰めよられ、私などたじたじになった。私が母校で教えるようになってからも、先生から受けた薫陶は大きかった。それだけに私がこの書から与えられた感銘もまた格別である。かつて先生は学生たちに「君の性格を見せてごらん。そうすれば君の神学を言い当ててあげよう」と言われた。海老名神学の背後にも海老名弾正その人がいたことを忘れてはなるまい。

（有賀鉄太郎・大正十一年大学神学部卒、元大学神学部長）

浅香正著

『ローマ文明の跡を訪ねて』

（吉川弘文館、B6判三四〇頁、二、五〇〇円）

かつてローマの日本文化館に勤務していたI氏が、この書物の著者浅香教授が、ローマでどのように熱心にかつ精密に遺跡を調査したかを私に語ったことがあった。（このいきさつは本書にも書かれている。）

著者は二年間にわたるハーヴァード大学での研究のしめくくりとして、ポルトガル、スペイン、南フランスのアルル、ロン

ドンとセント・オルバンズ、アムステルダム、フランクフルトの近郊ザールブルク、さらにイタリアに入っては、ミラノ、ヴェネツィア、ボローニャとマルツァボット、ラヴェンナ、フィレンツェなど、そして最後にローマとその周辺の旅を通して博物館、美術館、ローマの遺跡を実に丹念に、そして克明に見てまわった。約一ヵ月の間に、よくこれほど見ることができたものだと思う。著者が、ローマ史の専門家として厖大な予備知識を具えていることを勘定にいれるとしても。この著書には、著者の熱心で着実な人柄の投影がある。また、著者は、あるときは腰の痛みをおかし、あるときは交通の不便になやまされ、また炎天の下にさらされるなどの苦労を率直に語っている。物馴れた旅行者ではなく、著者みずからが苦労して歩きまわった姿が、読者に親しみを与え、それが本書の魅力の一つとなっている。

けれども本書は、単なる旅行記や印象記ではない。著者は、読者にローマ史への興味をよびさませようともしている。したがってローマ史の推移を手ぎわよくまとめて、読者に基礎知識を与えようとしたり、あるいは図版を各頁に挿入したり、また巻末にはくわしい年表や地図を加えるなど、親切な配慮にこと欠かないのである。

このように、この書物は血の通った旅行記であり、また、ローマ史へのいざないの書物であるのと同時に、著者自身の、多年にわたるローマ史研究が、どのような経過をたどってきたかという告白であり、そして著者が現在どのようなローマ史のテーマに興味をもっているかという学問的なかたりかけでもある。つまり、この著書は専門書としての性格をもかねそなえているともいいうるだろう。先住民族であるエトルスキの起源についての紹介を読者はきくことができるし、また、文献史料によるローマの起源よりも、現在有力になっている考古学的資料に依存する方法によって、建国が一世紀半も新しく設定されうるということ、あるいは、墓の所在地がローマ市の発展と相関関係をもっているにちがいないという著者の指摘などは、まことに興味深いものがある。

以上のべてきたように、読者はこの書物を通してローマの偉大にふれることができるのと同時に、ひとりのローマ史研究者の内面にふみこむことが許されるはずである。

（永井三明・大学文学部教授）

同志社歳時記

編者　生島吉造
　　松井全

発行所　同志社大学出版部

定価　六〇〇円